

事例2 「世界をねらう中国・北京市中関村の戦略」

講師 任 冉齊（北京市中関村科技園区管理委員会副主任）

（任） 皆様、こんにちは。今日はこのような機会をいただき、中国の中関村についてご紹介できる機会を得て、とてもうれしく思っております。中国・北京にありますテクノパークが中関村のテクノパークです。まず中国のマクロ経済についてご紹介をしてから、テクノパークについて話を進めていきたいと思っております。

（以下映像使用）

中国経済は、今、持続的に高成長をしております、世界での投資先となっております。特に、1980年代、中国大陸では改革開放政策をとって経済成長を維持しており、世界的にも注目を浴びているわけです。今、中国の経済規模は世界第7位で、輸出入総額は世界第9位にランクしています。また、外貨準備高と外資導入額は世界第2位です。今年の上半期、中国のGDPは8.2%の伸びを示し、工業の成長率は10.7%でした。そして、輸出は40%ほど伸びました。また、個人消費も11%伸びています。そして、財政の歳入は23.8%伸び、外国からの直接投資は30%伸びています。このように、数年にわたって外資を受け入れてきて、その規模はアメリカに次ぐ世界第2位になっています。

今、世界的に景気が減速しているわけで、特にアメリカのテロ事件以降、中国は政治が安定しているとか、経済が好調であるということから、多くの国からの注目を集め、投資家の理想的な投資先となっております。このような情勢が起きている理由は2つあると思います。1つは、中国が政局が安定しているということと、積極的な財政政策をやっていることです。2つ目は、科学技術と教育による立国という戦略を行いながら、ハイテク産業の振興を図っているということが、大きな理由として挙げられましょう。中国の北京、上海、深（シンセン）というのは、中国大陸においてハイテクの投資が最も集積しているところです。最も力のある3大都市といえましょう。北から南へ、ちょうど中国大陸におきましては、名実ともに3大ハイテク産業センターということが出来ます。もちろん、我が国に属する台湾の新竹も、世界で重要なハイテク製品の製造センターであるといえます。

また、1999年、中国の国務院は北京・中関村テクノパークの建設を早めようという答申を出しました。それによりますと、北京市の中関村は、全国でも人材、頭脳が最も集約している地域であって、知識的な強みがあり、ハイテク産業もそれなりのベースがあるので、中関村ハイテクパークを建設することによって科学技術の成果や知識の産業化を図り、北京市の産業構造調整を図るということは、北京の経済社会発展の加速にとっても重要な意義があると、この答申は述べています。

続きまして、中関村の概況についてご紹介していきます。中関村は、中国で最も科学技術や教育、そして頭脳が集積したところです。これだけ集積しているというのは世界でもまれに見るところでありましょう。このパーク内には、清華大学や北京大学など39の大学があります。大学生は30万人ぐらいいます。そして、中国科学院をはじめとする科学研究機関も213ほどあります。また、科学院や中国工程院といったアカデミー会員も、全国のアカデミー会員の37%を占めています。また、毎年、数千に上る科学技術の成果があり、主に情報技術やオプトメカトロニクス、バイオ、医薬といった分野に集中しています。

中関村テクノパークは十数年の歴史があります。今、研究開発や販売を主体とする海定園というところ、製造を中心とする豊台園や昌平園、そして、エレクトロニクス・ゾーン

や亦庄科学パークとよばれる5つのエリアに分かれています。

まず、海定園というのは、中関村の中心といえるところで、面積は75平方キロメートルあります。科学技術の開発や教育、トレーニング、そして、ハイテク関係の取引、商業の活動も活発です。豊台園は北京の南西部にあります。面積は5平方キロです。ここはIT製品やオプトメカトロニクス製品の主な製造センターです。昌平園は北京の北西にあり、海定園の北にあります。5平方キロで、やはりIT製品や医薬製品などの製造センターとして機能しています。そして、エレクトロニクス・ゾーンは北京の北東部にあって、10.5平方キロメートルです。IT製品の製造センターになっています。亦庄テクノゾーンは北京の南東部にあり、7.5平方キロメートルの面積です。主にIT製品や医薬製品の製造基地となっています。

それ以外に、中関村には発展区とよばれるところがあります。ここには、R&Dや生産、住宅といったところが集積されて、これから開発を行おうという団地式のところです。面積は286平方キロメートルです。南側と西側には小さな山があり、鳳凰嶺、陽台山とよばれる景勝地があります。北部は20平方キロメートルの南沙河といわれるリゾート区になっています。そこには、稻香湖とよばれる公園や湖畔の美しい別荘地もありますし、豊かな緑に囲まれています。ここは、今、大幅に建設をしている専門のエリアになります。テクノパークです。

中関村の産業構造と経済の規模ですが、中関村のハイテクパークは、IT産業を主体としています。2000年の各分野の収入を見てもみると、電子情報が71%、オプトメカトロニクスが6.7%、新医薬、バイオサイエンスが3.6%、新素材、新エネルギーが3.4%、その他の分野が15.3%という収入の構成になっています。

中関村テクノパークは、いまや北京の経済成長の主立ったポイントとなっていて、主な経済インデックスは、近年、30%以上を維持しています。中関村の製造業は、北京の産業経済成長に60%以上の寄与をしています。2000年における主立った経済指標では、中国大陸における53のハイテクパークの中の10%を我が中関村が占めています。

2001年(今年)の1月から9月の我がテクノパークの経済規模を見てもみると、引き続き成長を続けています。通年で見てみると、収入は全体でおそらく2000億から2100億元に達するでしょう。輸出は25億ドル、政府に納めた納税額は90億、新たな雇用機会の創出は4万~5万人です。全体の就労者数は35万人に上っています。

次は、中関村の発展戦略についてご紹介します。中関村は、中国のハイテク産業では非常に高い位置を占めています。今、中国社会では、「もし中関村に進出できなければ一人前とはいえない」という言い方がはやっています。つまり、研究開発機関がなければ、その技術は一流とはいえない。もし、販売網、販売センターがなければ、あなたの商品はまだいいとは言えないということです。中関村企業の製品技術は、全国市場を視野に入れています。また、中関村の企業も外部に向けて技術、ものを提供しています。

中関村の企業の特徴は、両サイドが中関村の中にあり、真ん中のプロセスが外にあるところだという言い方があります。両サイドというのは、技術開発の段階と最後のプロセスである販売です。しかし、真ん中の製造のプロセスは中関村の外部にあるということを指しているのです。これは、中関村の独特な特徴です。

このユニークな特徴は、2つの側面に表れています。1つは、細かいところですが、今ご覧いただいているのは、企業の状況です。ご覧ください。中関村の高い位置づけによっ

て、中関村の企業は中国の膨大な国内市場を非常に有効的に利用することができます。IT業を例に見ますと、2000年、大陸の電子通信産業の生産高が1兆元を突破しました。そのうちPCの市場は47%増加しました。また予測では、2010年のCPU(チップ)の需給量は500億米ドルを突破すると見られます。おそらく世界で最も大きい集積回路の市場となるということです。つまり、中国ではハイテク製品の市場ができたばかりで、これからは成長するのみです。

中関村の市場としての特徴、また、その研究開発での中心的な位置づけによって、ますます多くの多国籍企業の入居を集めているわけです。1999年末までに、世界的な企業500社がすでに北京に投資し、そのうち100社以上が中国センター、あるいはアジア太平洋事務所を北京に置いていて、そのうち半分弱が中関村に研究開発を設けています。例えば、IBM、マイクロソフト、インテルなどです。

私たちは、中関村が今後も東アジアおよび世界の最も重要なテクノセンターとなると見えています。それは、多くの中小企業、技術、人材が集中しており、また、多くのハイレベルの研究開発機関、あるいは大学が集中しているという特徴があるからです。また、中国の一流ビジネスマンには、情報の入手が非常に早いという特徴があり、優れた潜在力があるという特徴があるからです。

また、中関村は世界につながっています。技術・情報・資金のチャンネル、ルートがすでに出来上がっていて、中央政府のバックアップも非常に大きい要因になっています。

次は、戦略と具体的な措置について述べます。20年の改革開放をとおして、また、WTO加盟によって、中関村はますます中国をリードするようになります。しかしながら、我々にはまだ多くの課題があるのも事実です。次は、我々の課題についてご紹介したいと思います。また、今取り組んでいる重点についてもご紹介します。

まず、公平で透明な法律システム、法整備ということです。実は、2001年1月1日から、中関村をめぐる法律である中関村テクノパーク条例が発布、実施されています。これが1つです。また、私たちの取り組みとして、政府機能の転換も行っています。つまり、行政の簡素化、あるいは、行政の廃止、審査など必要ではない行政機能を簡素化しています。

3番目の措置として、情報の交流を積極的に奨励しています。今、中国の市場では、情報の交流、取引が非常に活発に行われています。しかし、政府のいくつかの規制により、情報活動の分野には、まだまだ多くの規制があるのも事実です。今後、そのような規制を撤廃して、情報の交流を一層図ろうと思っています。今、出している写真は、会議の会場の写真です。

4番目は人材の誘致です。そのために、人の流れの妨げとなるようなものをなくして、より自由に行き来できるような人材交流のシステムを私たちは行っています。つまり、インキュベーションの充実に力を入れているわけです。

次は5番目です。多国籍企業の誘致にも力を入れています。また、アメリカ・シリコンバレーにも中関村の事務所を設置しました。これは最新の動向です。多国籍企業の誘致について、その重要な一環として、外国企業の現地化の流れを促進しようとする措置も取られています。具体的には、日本の松下、三菱系の三菱四通集積回路、あるいは三菱移動通信、日立投資、北京ファナコ、それから、中国SMC、NEC-中国科学院ソフトウェア研究所、北京NTTデータシステムなど、日本関連の企業が多数、中関村に進出しており、大変優れた収益を上げているということです。

次は、6番目についてお話しします。引き続き、ハイテク技術に優れている人材の確保

に力を入れます。そのためには、知的所有権の保護、強力な政府によるバックアップが必要だと考えています。

7番目としては、国際企業との交流、あるいは、提携関係の促進、強化に力を入れています。中国は経済大国で、すでに世界のメーカーになっています。至るところに Made in China の表示が見られていると思います。しかし、中国は、経済の強国ではありません。まだまだ強くはありません。日本は東京オリンピックのあと、韓国はソウルオリンピックのあとに、国内の製品が世界的な市民権を得るようになったといわれています。2008年のオリンピックを機に、中国の北京にも同じような成功が訪れるよう願ってやみません。

ありがとうございました（拍手）